The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	接触打撃動詞と動能構文との関わり合い
Author(s)	前川, 貴史
Citation	Osaka Literary Review. 1999, 38, p. 145-160
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25422
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

接触打撃動詞と動能構文との関わり合い

前川貴史

0. 序

語彙意味論における一般的な考え方は、動詞は意味によってその統語的振る舞いが決定され、異なる動詞でも意味に共通部分が存在する場合には統語的にも共通した振る舞いを示すということである。そのような観点からVendler (1967) による動詞の4分類を定式化しようとする試みが現在まで盛んに行われている (Dowty 1979, Van Valin 1990, Levin & Rappaport Hovav 1995, 影山 1996, Rappaport Hovav & Levin 1998 など)。しかし、活動動詞 (activity verb) として分類されてきた動詞群に関しては、その意味構造がどのようなものなのかについて、未解決の部分が多く残されている (cf. 影山 1996a, b)。

例えば, 活動動詞に含まれる hit や spank などのいわゆる接触打撃動詞は (1) のような意味的共通性を持つが、これに含まれる個々の動詞の間には、(2)-(3) に示すように、動能構文 (conative construction) への生起に相違が見られる。

(1) "These verbs describe moving one entity in order to bring it into contact with another entity, but they do not necessarily entail that this contact has any effect on the second entity." (Levin 1993: 150-2)

(2) a. Bill *hit* at the dog.
b. Irv *kicked* at the wall. (Pinker 1989: 104)

(3) a. ＊Paula *spanked* at the naughty child. (Levin 1993: 152)
b. ＊Ben *whipped* at the horse. (黒崎 1997: 27)

このような振る舞いの違いに関しては van der Leek (1996) などに言及があるものの、根本的原因は未だ不明である。そこで本論では、活動動詞として区分されるもののうち特に接触打撃動詞に焦点を当て、それらが動能構文に出没する要因を明らかにすることを目標とする。

1. 動能構文に現れる動詞

動能構文に生起できる動詞は「移動」と「接触」(Guerssel et al. 1985, Pinker 1989, Levin 1993, Goldberg 1995, van der Leek 1996)、あるいは「状態変化を伴わない働きかけ (典型的には打撃や接触)」(影山 1996a, b) を表すとされる。(2) や (4) に見られる動詞の意味にはこれらの概念が含まれているので、これらの動詞は動能構文に生起可能である。

(4) a. Mary *cut* at the bread.
b. Sam *chipped* at the rock. (Pinker 1989: 104)

一方、(5) の例文に含まれている動詞は動能構文には使用できない。その理由は、上記の研究によると、(5a, b) の動詞は「移動」の概念を含んでいないし、(5c, d) の動詞は状態変化を表すので「接触」の概念は意味に内在されていないということである。

(5) a. ＊Nancy *touched* at the cat.
b. ＊Jane *kissed* at the child.
c. ＊Jerry *broke* at the bread.
d. ＊Bob *split* at the wood. (Pinker 1989: 104)

しかし、上記 (3) に見られる動詞はこのような説明に対する反例となる。動詞 spank と whip は (2) の動詞と共通して (1) という意味を持つのであるから、その意味にはまちがいなく「移動」と「接触」、あるいは「働きかけ」という概念が含まれていると考えられる。ゆえに上記の説明によるとこれらの動詞は動能構文に現れることができるはずである。しかし (3)

に見られるように、これらの動詞は動能構文には生起できない。

次節ではこの問題に対する先行研究である van der Leek（1996）を検討し、その問題点を指摘する。

2．先行研究と問題点

van der Leek（1996: 375-6）は、spank 等の動詞が動能構文に生起不可能であるという事実を次のように説明している。この類の動詞は、平手で叩くというような力を伴う移動に加え、それが引き起こす効果（effect）が骨格的意味（skeletal meaning）の一部として含まれている。ここでいう効果というのは、行為の対象に苦痛を与えることである．動能構文には言及していないが、Dowty（1991: 596）もこの種の動詞に対して類似した説明を与えている。彼は、行為の対象に苦痛などの精神状態をもたらすことから、これらの動詞を break 等と同じく一種の状態変化を表す動詞として分析する示唆を行っている。

このように van der Leek（1996）は spank などの動詞に対し、状態変化の意味を想定することによって、これらの動詞が動能構文に現れないという事実を説明している。(5c, d) に見られるように、状態変化動詞は動能構文に生起できない。

しかし、これらの行為が行われたからといって必ず苦痛を感じるなどの心理変化につながるとは限らない。さらに、以下のように、spank や whip は、break 等の達成動詞（accomplishment verb）とは統語的な振る舞いにも相違点がある。第一に、Fillmore（1970）で指摘された、身体部分所有者上昇交替（Body-Part Possessor Ascension Alternation）への生起可能性が挙げられる。接触打撃動詞は（6a）と類似した意味を（6b）の形式で表すことができるが、達成動詞の場合、(7a) を（7b）のように書き換えることができない。

(6) a. Paula {spanked／whipped} the naughty child's back
b. Paula {spanked／whipped} the naughty child on the back.
(cf. Levin 1993: 152)
(7) a. I {broke／bent／shattered} his leg.
b. ＊I {broke／bent／shattered} him on the leg.
(Fillmore 1970: 126)

第二に、達成動詞は、行為の継続時間を表す for 句とは共起できないが、spank や whip は可能である。

(8) a. John {spanked／whipped} the child for five minutes.
b. ＊John broke the cup for a minute. (cf. Tenny 1994: 47)

最後に、副詞句 hard や a lot との共起可能性である。打撃接触動詞はこれらの副詞句と共起できるが、達成動詞は共起できない (cf. 影山 1996: 74-75)。

(9) a. John {whipped／spanked} the child a lot.
b. John {whipped／spanked} the child hard.
(10) a. ＊The great earthquake broke old houses a lot.
b. ＊They broke the door hard. (影山 1996: 74-75)

以上で述べたように、spank や whip 等の動詞を状態変化を表す一種の達成動詞とする van der Leek (1996) および Dowty (1991) の説明には無理があるといわざるを得ない。

そこで以下では spank や whip 等の動詞が (1) のように「移動」と「接触」あるいは「働きかけ」の意味を含んでいながら、動能構文に現れない理由を探ることにする。

3. 動詞 spank と whip の用法

本論では、(3) に見られる whip や spank 等の動詞の意味が、動能構文とは相容れないような意味を持つという仮説を採る。つまりこれらの動詞

が（1）での記述だけでは捉えきれないような性質を持つものと考える。そして5節で、これらの動詞の語彙概念構造を提案する。そのための準備として、本節ではまず動詞 spank と whip の用法を観察する。

(11) a. LAST week on a bus, I saw a young mother *spank* her little boy when he said the F-word. (BNC: CBS 12257)
b. Slave masters strode through the crowds of men and women *whipping* them if they slowed down or showed any interest in the travellers. (BNC: HTY 3045)

下線部に表されているように、spank 行為や whip 行為にはその前提として、人物に対して罰を与えたり、移動や労働を強制するという目的が存在する。これは以下の辞書の記述によって裏づけられる。(12) は *COBUILD on CD-ROM* での動詞 spank の説明である。(13a) は *LDCE* での whip の動詞用法、(13b) は名詞用法の記述である。

(12) If you spank a child, you punish it by hitting it sharply with your hand, usually on its bottom several times.
(13) a. to hit someone with a whip
b. a long thin piece of rope or leather with a handle used for making animal move or punishing people.

下線部で示されているように、これらの動詞は罰を与えることや移動を強制することが意味として明記されている。

一方、例えば hit や kick は、次例のような場合にも使用される。

(14) a. John hit out (with that stick). (Dixon 1991: 104)
b. The leader exhibited a unique method of discovering my whereabouts in the darkness. He advanced slowly, *kicking* out viciously before him.
(ECME: E. R. Burroughs, *The Lost Continent*)

(14a) は特定の標的に向けられて行われる行為ではなく、乱暴な抑制のな

い行為を表している（cf. Dixon 1991: 104)。さらに、(14b) の実例で描写されているのは、足を前に出すことによって暗闇の中で人の所在を探す行為であり、その人を実際に蹴ろうとしているのではない。重要なことは、hit や kick の (14) のような用法では、被動者 (Patient) が存在しないということである。このことは、以下のように動詞の後に目的語を挿入してみると非文になることから確かめられる。

(15) a. ＊John hit out the door.
b. ＊John hit the door out. (cf. Dixon 1991: 104)

このように、spank や whip は罰を与えることや移動の強制という目的にのみ行われる打撃接触行為であるが、kick や hit などはそのような指定はないことがわかる[1]。

4．理論的前提

この４節では、分析のための枠組みを提示する。4.1 では出来事構造鋳型 と Template Augmentation という概念について、4.2 では出来事構造への参与者が二種類存在することについて、4.3 では動能構文のもつ出来事構造について述べる。

4.1 出来事構造鋳型

出来事構造鋳型 (event structure template) は、述語分解の方法に基づいて表示される。この構造は、原始的述語と定項の二つの構成要素から成り立っている。原始的述語の組み合わせによって、動詞の意味のうち、項の具現化などの文法に関係のある側面が表示される。一方、定項は個々の動詞特有の要素を表す。この方法によると、Vendler (1967) によるアスペクトの４分類は次のように表示される。

(16) a. [x ACT<*MANNER*>]　(activity)
b. [x <*STATE*>]　(state)
c. [BECOME [x <*STATE*>]]　(achievement)
d. [[x ACT<*MANNER*>] CAUSE [BECOME [y <*STATE*>]]]
(accomplishment)
(Rappaport Hovav& Levin 1998: 108)

定項である <*STATE*> と <*MANNER*> は、個別の動詞の表す出来事が指定する特有の状態と様態を表している。前者はこの構造内において項として機能しており、後者は行為を表す原始的述語 ACT に対して修飾機能を有している。そして個別の動詞は、定項として様々な要素が埋め込まれることによって派生される。例えば、活動動詞 run の語彙概念構造は以下のようになる。

(17) [x ACT<*RUN*>]

4つのアスペクトを（16）のように表示すると、アスペクト間の相互関係が明らかになるという利点がある。達成アスペクト（16d）の構造は、使役出来事とそれの引き起こす状態変化という二つの下位出来事から成り立っている。使役出来事の部分は活動動詞（16a）の構造をもっている。また、状態変化の部分は到達動詞の構造（16c）と同一である。つまり、達成動詞は、活動動詞の出来事構造鋳型に、使役を表す述語 CAUSE の仲立ちによって到達動詞の鋳型を増設したものである。

これによって動詞 run の次のような意味変化を説明することができる。

(18) a. Pat ran.
b. Pat ran <u>to the beach</u>.
c. Pat ran <u>herself ragged</u>.
(Rappaport Hovav & Levin 1998: 98)

（18a）で示されているように移動様態動詞 run は基本的には活動動詞であ

る。そこからの拡張用法である（18b, c）は、もとの意味に結果状態を付け加えて、それぞれ位置変化と状態変化を表している。結果状態の増設は、統語構造において他の要素が付け加わることによって示される。(18) の例では、run 自体は（16d）の出来事構造における活動アスペクト部分を表しており、結果状態部分は下線部で示されている要素で表される。

このような鋳型の増設というプロセスを、Rappaport Hovav & Levin (1998) は Template Augmentation として説明している。

(19) Template Augmentation:
Event structure templates may be freely augmented up to other possible templates in the basic inventory of event structure templates. (Rappaport Hovav & Levin 1998: 111)

(19) は、(18b, c) のように、活動動詞の出来事構造鋳型に原始要素が増設されることによって達成動詞型の出来事構造が生成される過程を述べている。

本論では（19）を拡張し、以下のような規定を行う。

(20) Template Augmentation に従って出来事構造の鋳型を増設していくことはできるが、逆に本来語彙概念構造に内在する要素を削除することはできない。

(20) によって、Rappaport Hovav & Levin (1998) で述べられた、活動動詞と達成動詞の間の統語的振る舞いの違いを説明することができる。詳しくは Rappaport Hovav & Levin (1998) を参照されたい。

4.2 定項参与者と構造参与者

定項と出来事構造鋳型との関係づけは、定項に関連する参与者と出来事構造鋳型の中の変項とが適合することによって行われる。例えば、run は移動を表す活動動詞であり、その定項は移動の様態を表している。移動の様態

は、runner という単一の参与者を供給する。この参与者は、行為を表す出来事構造鋳型の単一の変項と意味的に矛盾がないため、この二つは適合する。

一方、定項の供給する参与者が出来事構造鋳型の中の変項よりも数が多い場合がある。これは2項の活動動詞の場合である。例えば sweep は、定項によって sweeper と surface という参与者が供給される。前者は行為を表す出来事構造鋳型の単一の変項と適合する。しかし後者は出来事構造鋳型の中の変項に対応物はない。よってこの参与者の存在はは定項によってのみ認可されると考える。

このように、出来事構造の参与者には二つの種類がある。出来事構造鋳型と変項の両方に認可される「構造参与者（structure participant)」、そして定項のみに認可される「定項参与者（constant participant)」である。後者の参与者を下線を用いて次のように表す。

(21) [x ACT<*SWEEP*> <u>y</u>]　(Rappaport Hovav& Levin 1998: 114)

4.3　動能構文の出来事構造

本論では、動能構文の出来事構造として（22a）を仮定する。さらに、この出来事構造が（22b）の統語構造に写像されるものとする。

(22) a. [x ACT<*MANNER*> AT z]
　　b. [$_S$ x [$_{VP}$ V [$_{PP}$ at z]]]

（22a）は活動動詞の鋳型である [x ACT<*MANNER*>] に（20）に従って AT z を増設したものである。この AT z は ACT の表す行為の向けられる「標的」を表す[2]。この標的は行為の向けられる方向を表しているだけなので、その地点に実際に行為が及ばないこともあり得る。先行研究で明らかにされているように、例えば、John kicked at the wall においては John の打撃行為が実際に壁に及んだかどうかの規定はなく、この文は、そのよう

な行為が試みられたことだけを表している（cf. Levin 1993: 42)。

（22a）に示した動能構文の出来事構造は、単項の活動動詞鋳型［x ACT<*MANNER*>］に AT z が付加した形式をもつ。さて、活動動詞には、4.2 で見たように（23a）のような二項構造も可能であった（(21）参照)。しかし、(23a）に AT z を付加して（23b）の構造を作ることは不可能である。

(23) a. [x ACT<*MANNER*> y]
b. ＊[x ACT<*MANNER*> y AT z]

y 項は被動者であるので、ACT の表す行為は当然この項に向けられているはずである。よってこの構造に AT z を付加すると、行為の及ぼされる要素が二つ存在することになってしまう。一回の接触打撃行為の場合，その行為が向けられるのは一ヶ所だけであるので、二ヶ所に行為が及ぶことを表す（23b）は矛盾を含んでいることとなる。いうまでもなく（23b）を統語構造に写像した（24）は非文である。

(24) ＊John kicked Bill at {the wall／his clothes}.

よって、標的 AT z が付加される要素は単項の［x ACT<*MANNER*>］のみであり、二項構造をもつ［x ACT<*MANNER*> y］には付加できないと規定する。つまり、動能構文の出来事構造としては（22a）のみが適格である。

5．whip／spank と kick／hit の語彙概念構造

この節では、3 節での観察と 4 節で提示した理論的前提に基づいて、whip／spank および hit／kick の語彙概念構造を提案する。なお、whip や spank の同類としては cane, flog, thrash などの動詞が挙げられるが、以下では whip と spank を代表として議論を進める。

打撃によって罰を与えたり強制的に移動させたりするときには、その行為が対象に向けられるだけでなく、その人が打撃に接することが必要である。

この事実を捉えるため、whip と spank の語彙概念構造を次のように提案する。

(25) [x ACT<*WHIP/SPANK*> y]

この構造は、x が行う行為（x ACT<*WHIP/SPANK*>）によって、対象 y に打撃が伝わることを表す。<*WHIP/SPANK*> は鞭打ち行為や spanking 行為に特有の様態を表しており、行為述語 ACT に対して修飾機能を有している。そして打撃の対象 y は、この様態要素に付随している定項参与者である（4.2 参照）。こうすると、<*WHIP/SPANK*> の様態を伴う行為にはすべて打撃の対象が存在していなければならないことになる。これは、whip や spank は打撃の対象に対して罰を与えたり強制的に移動させたりする行為であるという（11)-(13）で観察した事実を適切に捉えている。

一方 kick や hit は、(14)-(15）が示すように、打撃対象はなくても行為が成り立つと考える方が事実に合致している。よってこれらの行為の様態 <*KICK/HIT*> は、打撃対象となる定項参与者 y を随意的に供給すると仮定する。これを（26）のように表す。

(26) [x ACT<*KICK/HIT*> (y)]

(26）の構造は、kick や hit の語彙概念構造には以下の二つの構造が存在することを表している。

(27) a. [x ACT<*KICK/HIT*> y]
　　 b. [x ACT<*KICK/HIT*>]

(27a）は定項参与者として打撃対象 y が様態要素 <*KICK/HIT*> から供給されている。この y が統語構造での目的語に写像され、(27a）は John kicked Bill などのような他動詞構文の概念構造となる。一方（27b）は打撃対象が供給されていない。よって目的語の存在しない（14）のような統語

構造に写像される。

(28) John hit out (with that stick). (= (14a))

このように本論では、罰や移動の強制などのために必ず対象への打撃を伴う whip や spank などの動詞に対し (25) の語彙概念構造を、打撃が随意的である kick や hit には (26) の語彙概念構造を提案する。

6. 説明

この節では、4節で提示した理論的前提と、whip や spank が (25)、kick や hit が (26) のような語彙概念構造を持つという5節での主張に基づき、前者の類の動詞が動能構文に生起不可能で、後者は生起可能であるという (2)-(3) で観察した事実に対して説明を行う。

(29) a. Bill *hit* at the dog.
b. Irv *kicked* at the wall. (= (2))
(30) a. ＊Paula *spanked* at the naughty child.
b. ＊Ben *whipped* at the horse. (= (3))

本論では 4.3 において、動能構文は (22a) の出来事構造をもつと仮定した。

(31) [x ACT<*MANNER*> AT z] (= (22a))

この構造は、単項の活動動詞の出来事構造 [x ACT<*MANNER*>] に標的を表す AT z を増設したものであった。5節で述べたように、hit や kick は (26) の語彙概念構造をもつので (27b) [x ACT<*HIT/KICK*>] の構造が可能である。この構造に標的 AT z を増設した (32) は、(31) の構造中の様態要素を具体化したものであり、動能構文の出来事構造として適格である。

(32) [x ACT<*HIT/KICK*> AT z]

よって kick や hit は（2）で観察したように動能構文に生起することができる。

一方 whip や spank の語彙概念構造は（25）[x ACT<*WHIP/SPANK*> y] であった。この語彙概念構造が動能構文の出来事構造（31）に当てはまるようにするには、定項参与者である打撃対象 y を削除した上で AT z を増設しなければならない。この削除操作は（20）に反している。ゆえに whip や spank は動能構文には生起できないのである。

このように、4節で提示した理論的前提と、whip や spank が（25）、kick や hit が（26）のような語彙概念構造を持つという5節での主張に基づくと、（1）の共通した意味を持つにも関わらず kick や hit は動能構文に生起でき、whip と spank は生起できないという事実がうまく説明される[3]。

7．その他の帰結

4節で提示した理論的前提と5節で提案した whip／spank と kick／hit の語彙概念構造を仮定すると、これらの動詞に関して、動能構文への出没以外にも重要な帰結が得られる。（33）のように、kick や hit は道具が標的へ移動することを表す構文が可能であるが、spank や whip は不可能である理由が説明可能となる。

(33) a. Paula *hit* the stick against the fence.　(Levin 1993: 148)
b. ＊Paula *spanked* her right hand against the naughty child.
(ibid: 151)

この構文の概念構造は達成動詞型の出来事構造をもつ（34）になると考えられる。

(34) a. [[Paula] ACT<*HIT*>] CAUSE [BECOME [[stick] AGAINST [fence]]]

b. ＊[[Paula] ACT<*SPANK*>] CAUSE
[BECOME [[right hand] AGAINST [child]]]

hit は（26）の語彙概念構造をもつので（27b）[x ACT<*HIT*>] の構造が可能である。この語彙概念構造から（34a）を生成するには，活動動詞の鋳型から達成動詞の鋳型へと（20）に従って下線部を増設するだけでよい。

一方 spank の場合には（25）[x ACT<*SPANK*> y] の y をまず削除してから下線部を増設しなければならない。この削除操作は（20）への違反である。よって（33）の形式をもつ構文に spank や whip は生起できないのである。

8．結論

この研究は、これまで充分な研究が行われなかった活動動詞に対して改めて焦点を当て、その出来事構造を解明することに関する研究である。そして具体的には、従来活動動詞として一まとめにされてきた打撃接触動詞のうち、罰を与えたり移動や労働を強制することに関わる whip や spank などに(25)、hit や kick に（26）の語彙概念構造を仮定することにより、前者の類が、動能構文に生起できないという事実を説明できることを示した。さらに、これらの動詞が（33）の構文にも現れないという事実に対しても同様の分析が適用できることを示した。

注

1．whip には次のような比喩的用法が存在する。

(i) The wind whipped my face. (*COBUILD on CD-ROM*)

この用法での whip は、移動の強制や罰を与えることには関わらないので、次のように動能構文が可能である。

(ii) The wind *whipped at* their cloaks and the horses kept their eyes half shut against it. (BNC: GWF 229)

2．影山（1996a, b）では動能構文に対して次のような意味構造が仮定されている。

(i) [x ACT ON y]

影山（1996a, b）は John hit Bill のような他動詞構文に対しても同じ構造を仮定し、両構文の違いは ON が at として統語構造に具現されるか否かの違いによるものとされている。しかし、この説明では、他動詞構文と動能構文が同じ意味構造を持つことになってしまう。よって本論のように、動能構文において前置詞句要素 AT z が増設されるものと考える方が適切である。

3．注 1 で述べた比喩的用法以外で whip が動能構文に現れている実例が、筆者の知る限り一つだけ存在する。

(i) He *whipped at* his horses with the reins and stared at the wood ahead, trying to drag it closer by sheer willpower.

(BNC: HA3 2928)

Jackendoff（1997）で述べられているように、本来は動能構文では用いられない carve などの動詞は、繰り返しを含意する away と共起すると動能構文に生起可能となる。

(ii) Simmy was carving ＊(away) at the roast.

(Jackendoff 1997:540)

(i) の例にも同様に、繰り返しの含意が見られる。馬に乗った人物が前方に見える森に接近しようと、意志の力によってそれをまるで自分のところに引き寄せるかのように、馬を繰り返し鞭打ちつづける様子を読み取ることができる。

主要参考文献

Dixon, R. M. W. 1991. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles.* Clarendon Press.

Dowty, D. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar.* Reidel.

---. 1991. "Thematic Proto-roles and Argument Selection." *Language* 67: 547-619.

Fillmore, C. L. 1968. "The Case for Case." In E. Bach, and R. T. Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*, 1-88. Holt, Rinehart & Winston.

---. 1970. "The Grammar of *Hitting and Breaking*." In R. A. Jacobs, and P. S. Rosembaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, 120-133. Grinn, Waltham.

Guerssel, M., K. Hale, M. Laughren, B. Levin, and J. W. Eagle. 1985. "A Cross-Linguistic Study of Transitivity Alternations." *CLS* 21: 48-63.

Goldberg, A. E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to*

Argument Structure. University of Chicago Press.
Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. MIT Press.
---. 1997. "Twistin' the Night Away" *Language* 73: 534-559
影山太郎. 1996a.「活動動詞の意味論」『人文論究』45: 99-115. 関西学院大学人文学会.
---. 1996b.『動詞意味論』くろしお出版.
黒崎茂樹. 1997.「動能構文の語彙表示と構文表示」KLS 18: 23-32.
Leek, F. C. van der. 1996. "The English Conative Construction: A Compositional Account." *CLS* 32: 363-378.
Levin, B. 1993. *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. University of Chicago Press.
Levin, B. and M. Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity*. MIT Press.
丸田忠男. 1998.『使役動詞のアナトミー』松柏社.
Pinker, S. 1989. *Learnability and Cognition*. MIT Press.
Rappaport Hovav, M. and B. Levin. 1998. "Building Verb Meanings." In M. Butt and W. Geuder (eds.) *The Projection of Arguments*. CSLI Publications.
Tenny, C. L. 1994. *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Kluwer Academic Publishers.
Van Valin, Jr., R. 1990. "Semantic Parameters of Split Intransitivity." *Language* 66: 221-260.
Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.

辞書

COBUILD on CD-ROM. Harper and Collins.
Longman Dictionary of Contemporary English. 3rd ed. 桐原書店. [*LDCE*]

コーパス

British National Corpus. (http://thetis.bluk/lookup.html) [BNC]
The Entire Collection of Modern English.
(http://www.hti.umich.edu/english/pd-modeng/) [ECME]